

ロンドンの「霧」をめぐって（1）

文化的、歴史的考察

若林 達司

会津大学短期大学部研究紀要 第77号抜刷

2020年 3月

ロンドンの「霧」をめぐって(1)

文化的、歴史的考察

若林 達司*

要旨

本稿は戦後間もない1952年にロンドンで発生したロンドンスモッグと呼ばれる公害、災害に関する考察の一部である。特に本稿では、smog というかばん語の語義の考察からはじめ、その歴史上の使用例の確認の確認を行った。また、いくつかの文学作品を手掛かりにしてロンドンの「霧」が、特に19世紀以降、市民文化に与えたインパクトを追跡した。文学作品ではチャールズ・ディケンズの『荒涼館』、コナン・ドイルの『ブルース・パーティントン型設計図』、ベロック・ローゼの『下宿人』、マジェリー・アリングガムの『霧の中の虎』を取り上げた。

*会津大学短期大学部准教授

The yellow fog that rubs its back upon the windows-panes
 The yellow smoke that rubs its muzzle on the window-panes,
 T. S. Eliot, *The Love Song of J. Alfred Prufrock*

1 はじめに

メリー・ポピンズは東風が吹きすさぶ、寒さが骨身に染みるような日に桜通り 17 番地にやってきた。桜通り 17 番地、すなわちバンクス氏宅、ジェーンとマイケルの住む家だ。メリー・ポピンズはやがて、風が変わり、春の最初の日に、西風に乗って去って行った。

パメラ・トラヴァース (Pamela Travers) が小説『風にのってきたメアリー・ポピンズ』¹ (*Mary Poppins*)² を出版したのは 1934 年のこと。その後この作品を読んだウォルト・ディズニーが惚れ込みミュージカルとして映画化したのが 1964 年。初めて作品が世に出てから 30 年の歳月が流れたことになる。この間、ウォルト・ディズニーが熱心にパメラ・トラヴァースを説得し映画化にこぎつける経緯は『ウォルト・ディズニーの約束』(*Saving Mr. Banks*, 2013 年) に詳しく描かれている。

映画『ウォルト・ディズニーの約束』³ では、アルコールに浸るパメラ・トラヴァースの父とメリー・ポピンズが家庭教師を務める家の主人バンクス氏とが対をなして描かれる。小説ポピンズの実の主人公はバンクスで、ポピンズがやってきたのはバンクス氏あるいはバンクス家を支えるためだったのではないかと思わせる内容だ。

さて、小説 *Mary Poppins* と映画 *Mary Poppins* との間に流れる 30 年には、アメリカ、イギリス両国ともに重大な歴史的経験をする。第二次世界大戦だ。アメリカ本土は戦禍を被ることはなかったものの、イギリスはドイツ軍の空爆を度々受け、ロンドン市内も大規模な破壊から免れることはできなかった。また、今回の論考で取り上げるロンドンスモッグ (The Great Smog) もイギリスが経験した災害で、映画 *Mary Poppins* の風景を特徴づけるひとつだと思われる。

はたしてメリー・ポピンズはそのロンドンの空を飛べたのだろうか。これが最初の疑問だった。映画ではポピンズもパートもマイケルもジェーンも、みんな煤だらけになりながら煙突から降りてくる。ポピンズの魔法で作られた空中の階段を上り、煙突掃除人のダンスを楽しむシーンはとても楽しげだ。しかし、Killer Smog⁴ と呼ばれる煤煙で満たされることも恒例となったロンドンの空は、マイケルやジェーンたちの遊び場になるほど愉快的な場所だったのだろうか。

1. 1 1952 年ロンドンスモッグ

本稿の背景となるロンドンスモッグとは、1952 年 12 月 5 日から 9 日までの五日間にわたり晴れることなくロ

¹ トラヴァース, P.L. 『風にのってきたメアリー・ポピンズ』、林容吉訳、岩波書店、1954 年

² Travers, P. L., *Mary Poppins*, Harcourt, INC, 1934

³ 『ウォルト・ディズニーの約束』、原作名 *Saving Mr. Banks*、2013 年

⁴ 1952 年のロンドンスモッグを指すのは Great Smog という表現が一般的だが、William Wise がロンドンスモッグについて取材したノンフィクション作品では書名が *Killer Smog* と題されている。また Joyce Markovics による児童向けの歴史書でも書名に *Killer Smog* とうたわれている。

ンドン全体を覆い、4000人以上の死者⁵を出した災害のことを指す。詳細については論稿を重ねながら述べてと
して、まずはその導入として語義を確かめることなどから始めたい。

2 スモッグの語源

2. 1 Smog – its word history(etymology)

Smog (スモッグ)という語は smoke (煙) と fog (霧) との portmanteau (かばん語) である。

たとえば blackboard は black と board、landscape は land と scape との合成語であるが、合成語とは二つのことば(単語)がほぼ完全な形で結合されているのに対して、かばん語は二つのことばを合わせることに加え、綴りが改変され新たな意味が創出されたものと言える。たとえば上記の smog や、breakfast (朝食) と lunch (昼食) をくっつけて brunch (朝食と昼食の間の時間を取る食事) が出来上がったたり、international (国際的な) と network (網) が合わさり internet (インターネット) となったり、rock'n roll (ロックンロール) と hillbilly (田舎者) を合わせて rockabilly (ロカビリー) が作られたりする例が挙げられる。さらに、近年のかばん語である workaholic は“work”と“alcoholic”のかばん語で、現代人の強迫的な仕事ぶりを示す適語であろう。

Portmanteau (かばん語) というのはルイス・キャロル (Lewis Carol) が『鏡の国のアリス』⁶で紹介している。アリスとハンプティダンプティとの会話の中で披露される“Jabberwocky”という叙事詩の始めの4行、ここにはかばん語がぎっしり詰まっている。

Twas brillig, and the slithy toves
Did gyre and gimble in the wabe;
All mimsy were the borogoves,
And the mome raths outgrabe.⁷

一行目の“slithy”はハンプティダンプティの説明によれば“lithe and slimy”のかばん語、三行目の“mimsy”は“flimsy and miserable”ということになる。すなわち、

You see it's like a portmanteau — there are two meanings packed up into one word.⁸

(両開きのかばんみたいなものだよ——一つの単語に二つの意味が詰まってる)

⁵ 死者数については、長期的にこのスモッグの影響を見積もった場合 12,000 人という説も出されている。たとえば、日本の国立環境研究所による『大気汚染の健康影響研究』(『環境儀』、NO. 21、2006) では 1952 年 12 月のスモッグが発生した期間だけで死亡者「通常よりも 4,000 人増加」したと記している。またイギリス気象庁は“About 4,000 people were known to have died as a result of the fog, but it could be many more.”と述べ、4,000 人以上の死亡者が出たことを示唆している；<https://www.metoffice.gov.uk/weather/learn-about/weather/case-studies/great-smog>

⁶ キャロル, ルイス『鏡の国のアリス』、角川書店、2010 年、河合祥一郎訳など。

⁷ Carroll, Lewis, *Through the Looking-Glass*, Kindle, 190

⁸ Ibid., 1109

さて smog なる語は H. A. des Voeux 博士が 1905 年に Journal of American Medical Association⁹⁾に紹介したものが最初とされている。

At recent health congress in London, a member used a new term to indicate a frequent London condition, the black fog, which is not unknown in other large cities and which has been the cause of a great deal of bad language in the past. The word thus coined is a contraction of smoke fog “smog” – and its introduction was received with applause as being eminently expressive and appropriate. It is not exactly a pretty word, but it fits very well the thing it represents, and it has only to become known to be popular. London is undoubtedly the proper place for its coinage, for it is said to surpass all other places in the opacity of its smog, but so far as mere darkness is concerned some other British and American cities would afford ample justification for the use of the term. (下線は引用者による¹⁰⁾)

特に下線を施した部分をまとめると、smog ということばはロンドンで頻繁に発生する black fog 「黒い霧」を指すこと、ロンドンの smog による opacity (視界の悪さ、不透明性) は他の都市に比べて劣悪であること、単に darkness (暗さ) =opacity (不透明度) だけで言えばイギリスやアメリカの都市も十分にこの語が当てはまること。第一次世界大戦の前になる 1905 年の時点ですでにロンドンは「黒い霧」に覆われること度々で、後にも述べるように、人や車などの移動にも支障を来すほど深刻な濃霧となったことがここからわかる。Smog というかばん語はまさにこの都市の実情を示す最適な表現であったと言える。

2. 2 エンドウ豆スープ—Pea Soup

これもロンドンの霧を指す表現だが、smog ということばよりも古くから使われている。OED によれば、pea と soup を合わせて一語とした peasoup の初出が 1899 年とされ、次のような引用がある。

A peasoup fog in March is going a little too far in the way of meteorological jokes.

(OED から引用。Westm. Gaz. 15 Mar. 2/3)

日本人にはなじみが薄いかもしれないが、エンドウ豆のスープは欧米では比較的一般的な食べ物で、文字通りエンドウ豆をすり潰したスープのこと。緑色や薄茶色のものがあり、どろりとした食感が特徴だ。ロンドン、あるいは産業革命以降の都市圏で発生したスモッグは石炭を燃やして出る煙が霧に混じり、重々しく、このエンドウ豆スープにたとえられてきた。しかし、この初出例ではまだ“pea soup fog”と表現されている通り、あくまでも fog に対する修飾語という機能にとどまり、fog の代名詞となっているわけではない。

一方、Wikipedia には pea soup についてジョン・サーテン (John Sartain) が 1820 年に言及した例が報告されている。

Wake at half past seven; - remember this is the day you are to paint the head of your principal figure! – hope,

⁹⁾ Des Voeux, Des Des Voeux H. A., SMOG. *JAMA*. 1905;XLV(9):637

¹⁰⁾ 以下、引用部分の下線は引用者によるものである。

in the name of Raffaele (in original), the day may be a fine one; hope there may be a good light; hope it may not rain; hope there may be no fog; (omission) and what you mistake for an obstruction of the light inside your window, find to be a thorough-bred dark, dingy, heavy wet, muggy, smoky, greasy, filthy, yellow London fog, of the true sort outside!¹¹

朝 7 時半に目覚め、外が霧でないことを願うものの、見えるのは真っ暗闇で (thorough-bred dark) 薄汚く (dingy) 重く湿り (heavy wet) すすけて (muggy) 煙っぽく (smoky) 油ぎって (greasy) 不潔で (filthy) 黄色い (yellow) ロンドンの霧。これでもかというほど、八つも形容詞を並べてジョン・サーテンは霧を表現している。しかもどの形容詞も不快さを表すものばかりで、この画家サーテンがどれほど霧を嫌がっていたかがわかる。

and slink home through a fog as thick and as yellow as the pea-soup of the eating house; return to your painting room with no other exercise than the walk backwards and forwards, and prepare for another day of *delightful* study; on entering your room, having opened your window at going out, find the stink of the paint rendered worse, if possible, by the entrance of the fog, which, being a compound from the effusions of gas pipes, ten yards, chimneys, dyers, blanket scourers, breweries, sugar bakers, and soap boilers, may easily be imagined not to improve the smell of a painting room!¹²

エンドウ豆スープ (the pea-soup) のように濃く、黄色い霧の中をぬけて画家は家に入る。ロンドンの霧がエンドウ豆スープに譬えられた初出である。続く記述は画家サーテンのアトリエだと思われる。ガスパイプや 10 ヤード (意味不明)、煙突、染物屋、毛布の洗濯屋、蒸留所、砂糖の製造工場、石鹼工場から排出される煙と霧が合わさるって部屋に忍び込んでくると、鼻を突く絵の具の匂いどころではなくなる。

ジョン・サーテンは 1808 年にまれ、1830 年にアメリカに渡り活躍した画家である。この文章は 1820 年のものとされているが、ロンドンに漂う臭気と濃い霧と若い芸術家がいだく憂鬱感が余すところなく表現されている。1661 年にジョン・イーヴリンが *Fumifugium: or The Inconveniencie of the Aer and Smoak of London Dissipated. Together with some remedies humbly proposed by J. E. Esq; to his sacred Majestie ...*¹³で述べた不快なロンドンの煙が何も改善されないまま 160 年間変わらずに続いていたことになる。

3 ロンドン名物の「霧」—London Particular

いわゆる気象現象としての「霧」を表す語には、fog の他に mist や haze がある。これらの意味を厳密に分けることは難しい。Corton は *London Fog: The Biography*¹⁴の中で、ロンドンの霧がこれら mist や haze とはま

¹¹ Sartain, John, 'A miseries of an Artist', *Annals of the fine arts*. IV, 1820, p.80 今日、Sartain によるこの文章は Google Books により無料公開されている ; <https://books.google.co.jp/books?id=hV8tAAAAMAAJ>

¹² Ibid., p.80

¹³ Evelyn, John, *Fumifugium: or, the inconvenience of the aer, and smoake of London dissipated. Together with some remedies humbly proposed by J. E. Esq; to his sacred Majestie, ...*, 現在、この書籍版は ECCO Printed Editions から入手可能である。

¹⁴ Corton, Christine L, *London Fog: The Biography*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2015

まったく違うものとして見られるようになったのは1840年代以降だと述べている。そのひとつとして Schlesinger による次のような1853年の会話を紹介している。

“WHAT a dreadful fog there is to-day!”

“Nothing of the kind, Madam. Cloudy and wet, perhaps, and a little misty; but a fog— no Madam, that haze is not a fog. Fogs are yellow and black; in a fog, the carriages and foot-passengers run against one another. It hurts your eyes, and takes away your breath; it keeps one in doors. But this is not what a Londoner would call a fog.”¹⁵

今日はなんてひどい霧なんでしょうねと話しかけるご婦人に対して、一方の紳士が答えるに、haze は fog ではなく、fog というのは黄色くまた黒いもの。さらに、霧の中では馬車や通行人がぶつかり合うし、目を傷めるし、呼吸もできなくなる。外になんて出られたものじゃないと。ロンドンの人はこんなのを霧とは呼ばないというのだ。

すでに見てきたように、サーテンがロンドンに発生した霧のことを pea-soup と呼んでから約30年。ロンドンで生活する人にとっては家々や工場の煙突から出る煙が霧に混じって前も見えなくなった状態が「霧」と呼ばれるようになっていたのだ。

偶然ながら Schlesinger がこの会話を披露したのはディケンズが『荒涼館』(*Bleak House*)で「ロンドン名物」(London particular) と書いた1853年であった。

...I asked him whether there was a great fire anywhere? For the streets were so full of dense brown smoke that scarcely anything was to be seen.

"Oh, dear no, miss," he said. "This is a London particular."

I had never heard of such a thing.

"A fog, miss," said the young gentleman.¹⁶

(私はどこかで大きな火事があるのですかと尋ねました。というのは、方々の通りに濃い煙がみちていて、ほとんどなんにも見えなかったのです。「いや、とんでもない。これはロンドン名物なんです」それは初耳でした。「霧ですよ、お嬢さん」)¹⁷

3 ディケンズ『荒涼館』

ロンドンの霧のイメージを文学作品の中で揺るぎないものにしたのはディケンズの『荒涼館』であると言って差支えないだろう。何を置いてもその冒頭部分是非常に有名だ。

Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river, where it rolls defiled among the tiers of shipping and the waterside pollutions of a great (and dirty) city. Fog on the

¹⁵ Schlesinger, Max. *Saunterings in and about London*, Kindle, 2472-2475

¹⁶ Dickens, Charles, *Bleak House*, Kindle, 528-532

¹⁷ ディケンズ, C. 『荒涼館 1』、青木雄造、小池滋訳、1989年、ちくま文庫、p.61

Essex marshes, fog on the Kentish heights. Fog creeping into the cabooses of collier-brigs; fog lying out on the yards and hovering in the rigging of great ships; fog drooping on the gunwales of barges and small boats. Fog in the eyes and throats of ancient Greenwich pensioners, wheezing by the firesides of their wards; fog in the stem and bowl of the afternoon pipe of the wrathful skipper, down in his close cabin; fog cruelly pinching the toes and fingers of his shivering little 'prentice boy on deck. Chance people on the bridges peeping over the parapets into a nether sky of fog, with fog all round them, as if they were up in a balloon and hanging in the misty clouds.¹⁸

(どこもかしこも霧だ。テムズ川の川上も霧で、緑の小島や牧場のあいだを流れている。川下も霧。ここではたくさんに並んだ船のあいだや、この大きな(そして薄汚い)とかいの不潔な河岸のあたりを、霧が汚れた渦をまいて流れてゆく。エセックス州の沼沢の上も霧、ケント州の丘陵の上も霧、そして石炭運搬船の上甲板の賄い所の中へ忍び入る、大きな船の帆桁の上に寝そべる、索具の中をうろつく、はしけや小さなボートの船べりにしなだれかかる。グリニジ海軍病院の病室の暖炉のそばで、ぜいぜいと咳きこんでいる老廃兵の目やのどの中へもはいりこむ、むかつ腹を立てた船長が甲板下の息苦しい自室の中でふかしている午後のパイプの柄や火皿にはいりこむ、その上を甲板で身ぶるいしている、おさない見習い水夫の手や足の指をじゃけんにつねる。橋の上を通りかかった人たちがらんかん越しに、空に見まごう下の霧をのぞいている、そのまわり一面も霧で、さながら人々は軽気球に乗って、雲のもやのなかに浮かんでいるよう。)¹⁹

時は11月。「煤煙が家々の暖炉の煙突から舞いおり、ぼたん雪ほどもある大きな煤のかけらをまじえた、黒い、しっとりした霧雨になる²⁰」。この霧は気象現象の霧に加えて煤煙と煤が混じって地面に舞い降りる。そのために通行人は足をすべらせるし、地面は泥まみれ。『荒涼館』はロンドンの「霧」を定着させただけでなく、当時の汚らしい町の様子を余すところなく描いている。

「冒頭の、視界が悪く暗い霧のシーンでディケンズが述べたのは、大法院の様子を語るメタファーだけでなくそれに続く物語の明暗、ロンドンという町を表すもっと広い意味のメタファー」であると Corton は指摘する²¹。

「霧と煙が個人を照らす光を遮る町」(“a place where light is largely denied to individuals ... by the smoke and fog”²²)。これが『荒涼館』の描くロンドンであり、霧であった。

ディケンズの描くロンドンの霧は『荒涼館』だけに留まるものではない。『われらが友』(*Our Mutual Friend*)ではロンドンそのものを霧で表現し尽くしている。

Even in the surrounding country it was a foggy day, but there the fog was grey, whereas in London it was, at about the boundary line, dark yellow, and a little within it brown, and then browner, and then browner,

¹⁸ Dickens, 112-121

¹⁹ ディケンズ、p.8

²⁰ 同上、p.7

²¹ Corton, p.61 また Corton は別の箇所では“Dickens saw that just as much as fog was a part of London life, it was also a metaphor for London itself.”と指摘している ; Corton, p.76

²² Ibid., p. 61

until at the heart of the City—which call Saint Mary Axe—it was rusty-black.²³

霧が出た日など、ロンドン郊外では灰色っぽく見え、ロンドン市の周辺部になると暗い黄色がかり、街中に近づくと茶色くなりどんどん茶色が濃くなってきて、シティ中心部に至ると黒く錆びたような色になる。言うまでもなくこの霧の色の変化は、人口密集地帯であるロンドン中心部で暖を取るために盛んに燃やされる石炭から出る煤煙が原因であり、黄色く見えるのは石炭の煙に含まれる硫黄成分、真っ黒に見えるのは煙そのものである煤なのだ。さらに、次第に濃さを増すこの色の変化は「ロンドンそのもの、また人々の荒廃を象徴する譬え」²⁴に使われている。1952年のロンドンスモッグに踏み込む前に、もう少し文学作品を手掛かりにしながらロンドンと霧の関わりを見よう。

4 霧の中の殺人事件—コナン・ドイル『ブルース・パーティントン型設計図』

1908年に『ストランドマガジン』(*The Strand Magazine*)に掲載された『ブルース・パーティントン型設計図』はコナン・ドイルのシャーロック・ホームズシリーズの中でも唯一霧のロンドンを舞台にした作品だ。ロンドン、ベイカー街に居を構えるホームズを主人公にした連作が霧を描いていないことは意外にも見えるが、『ブルース・パーティントン型設計図』は霧と殺人、霧にひそむ凶悪をたっぷりと見せてくれる。

スモッグということばが世に現れた1905年から遡ること10年前の1895年、舞台となる冬のロンドンと同じく霧に包まれていた。ヴィクトリア朝後期、19世紀後半、コナン・ドイルがシャーロック・ホームズシリーズの『ブルース・パーティントン型設計図』冒頭で描いたのは連日にわたって晴れないロンドンの霧だ。

まずはこの作品の冒頭に描かれた描写を見てみよう。あたかも我々の目の前が霧に曇るような光景だ。

In the third week of November, in the year 1895, a dense yellow fog settled down upon London. From the Monday to the Thursday I doubt whether it was ever possible from our windows in Baker Street to see the loom of the opposite houses. The first day Holmes had spent in cross-indexing his huge book of references. The second and third had been patiently occupied upon a subject which he had recently made his hobby—the music of the Middle Ages. But when, for the fourth time, after pushing back our chairs from breakfast we saw the greasy, heavy brown swirl still drifting past us and condensing in oily drops upon the window-panes, my comrade's impatient and active nature could endure this drab existence no longer. He paced restlessly about our sitting-room in a fever of suppressed energy, biting his nails, tapping the furniture, and chafing against inaction.²⁵

下線部のところを抽出してみよう。1895年の11月第三週のこと、黄色い濃厚な霧がロンドンを覆っていた。ベイカー街221bの部屋から通りを挟んだ向かいの家の明かりが見えたかどうか、それも月曜日から木曜日の4日間。重くてべたつく茶色い霧が窓越しに渦巻き、窓ガラスには油っぽい水滴がついている。

今でこそベイカー街は片側2車線の道路で幅広いが、おそらく1895年当時はもっと道幅が狭く、夏の晴れた日には通りの向かいの家は中まで見えたはずだ。もちろんホームズとワトソンが暮らす221bは小説に登場する架空

²³ Dickens, Charles, *Our Mutual Friend*, Kindle, p.146

²⁴ Corton, p.65

²⁵ Doyle, Arthur Conan, *The Adventure of the Bruce-Partington Plans*, Complete Sherlock Holmes Cannon, p. 1

の住まいで、現在のベイカー街にあるシャーロック・ホームズ博物館も当時のままだと思っはいけない。しかしながら、当時のロンドンの道幅を考えてみても、向かいの家の明かりすら見えないくらいの濃い霧というのはどれほどだったのだろうか。

しかも視界を遮って垂れこめているのは、気象学的に説明できる霧だけではない。この霧は“yellow”、黄色いのだ。家庭で燃やす石炭から出る煙に含まれる硫黄成分が水滴に付着してこの色となっている。通常の気象現象として我々が目にする白い霧よりも濃く見えて、そのために視界を著しく低下させているのだ。

“greasy, heavy brown swirl still drifting”。油ぎったような(greasy)、しかも重苦しくて、茶色く見える(brown)渦が漂っているのが見えるとドイルは続ける。霧がただの水滴ではなく、石炭を燃やして排出される煙が混ざり、そのために黄色や茶色に見える色だけでなく、質感も油ぎったように、重苦しくなる。窓ガラスに付着する水滴も然り。“oily”な水滴が凝縮されたようだというのだ。

この冒頭の描写に続いて、霧のため外出できず部屋に閉じこもり退屈の極みに達したホームズはワトソンに次のように話しかける。

Look out this window, Watson. See how the figures loom up, are dimly seen, and then blend once more into the cloud-bank. The thief or the murderer could roam London on such a day as the tiger does the jungle, unseen until he pounces, and then evident only to his victim.²⁶

窓の外を見ると、人影がぼうっと現れてまたのっぺりした壁のような霧に溶け込んでゆく。泥棒や殺人者がロンドンの街中をうろつくのだ。それはあたかも虎が密林で獲物を襲うかのようで、襲いかかってくるまで何も見えないし、あとに残るのは被害者だけだ。

ほんの近くに寄るまで人の姿も見分けられないほどのロンドンの霧の濃さ。『ブルース・パーティントン型設計図』はこの霧を巧みにとり入れた暗い闇に展開する事件だった。余談だが、グラナダ版シャーロック・ホームズ『ブルース・パーティントン型設計図』の冒頭では、ジェレミー・ブレット扮するシャーロック・ホームズは窓の外にたちこめる霧を見ながら“It's a real pea souper”²⁷（これが本当のエンドウ豆スープだ）と嘆息をもらす。もちろんこれは原作にはなく、グラナダ版での創作である。

地下鉄の車両から転落して死んだと思われたカドガン・ウェストは、ウォルター大佐を霧深い中で追い、被害に遭う。

He had his suspicions before, and he followed me as you describe. I never knew it until I was at the very door. It was thick fog, and one could not see three yards.²⁸

後をつけられていても、濃い霧で3ヤード先も見えなかった。1ヤード=9.144メートルだから約2.7メートル先も見えないほどの霧である。犯人も姿を眩ませることができし、追いかけてられていても分からない。このカドガン・ウェストは不幸なことにオーバーシュタインの振り上げた仕込み杖で頭に一撃をくらって命を落とすことになった。犯行後、ウォルター大佐は、線路沿いに建つ家の階下に停車した列車の屋根に指示通りに死体をおろ

²⁶ Doyle, p. 1

²⁷ *The Adventure of Sherlock Holmes*, イギリスグラナダテレビ制作、1984-1994

²⁸ Doyle, p.13

す。

It was so thick that nothing could be seen, and we had no difficulty in lowering West's body on to the train.²⁹

ロンドンの霧は二人の犯行を見事に包み隠したかのようだった。しかし部屋の窓から階下に停車した車両に死体を下すという手口をホームズが見抜いたのも、皮肉なことに石炭を燃やして出る煙が残す煤のおかげだった。窓の棧は煙の煤で真っ黒だったが、死体を引きずり下ろしたと見える一部だけこすれて薄くなっていた。よく調べると血痕も見つかった。

Holmes swept his light along the window-sill. It was thickly coated with soot from the passing engines, but the black surface was blurred and rubbed in places.³⁰

1863年に開業したロンドンの地下鉄はホームズの時代である1895年はまだまだ蒸気機関でけん引する車両が使われていた。列車が走る地下部分はもちろん、『ブルース・パーティントン型設計図』の冒頭で死体が発見された地上部分でも、エンジンから出る煙と煤に対する評判は著しく悪かった。おまけに地下鉄地上部分の沿線に建つ家の窓はこの記述にあるように、棧が煤で真っ黒になっていた。

ディケンズでもドイルでも一貫して霧は黄色く、また煤けて黒く、その中にあっては人影も見えないくらいに視界が悪い。ディケンズにとってロンドンを閉ざす濃い霧が街と人々の荒廃を象徴するものだったとすれば、『ブルース・パーティントン型設計図』はロンドンの悪を覆い隠すベールとなった。

5 霧の中の『下宿人』

産業革命期以降、11月から寒気が厳しくなる季節になると頻繁に発生したロンドンの「霧」は時には数日、長くは1週間以上も続いた。ドイルの『ブルース・パーティントン型設計図』が発表された1908年からわずか5年後、ロンドンを連続殺人事件の舞台へと変えたのがベロック・ローンズ (Belloc Lowndes) だ。

ドイルの『ブルース・パーティントン型設計図』では地下鉄の線路上で遺体が発見されたことをに端を発し、ホームズの聡明な推理で事件が解決されていった。霧は悪が巢食う闇である一方、ホームズの推理は闇に指す一筋の閃光であった。物語終盤で真っ暗な部屋で息をひそめて身構えるのはホームズ、ワトソン、レストレード、マイクロフトの四人。闇に潜むのはここでは悪ではなく正義そのものでもあった。『ブルース・パーティントン型設計図』を特徴づけるのは、暗闇の中で事件の真相が判明する場面転換の鮮やかさだ。

ローンズの『下宿人』(*The Lodger*) は霧の中で事件が続き、霧の中で猜疑心が止まらなくなり、犯人と事件の真相は分からぬままという異色の物語である。事件の起きたのは同じく11月。霧と11月がある種の符丁のように一体化して舞台を形作っている。

下宿人スルウス氏の行動には奇妙なものがあつた。それが夜半の出歩きだつた。

A funny idea—a funny habit that, of going out for a walk after midnight in weather so cold and foggy that

²⁹ Doyle, p.13

³⁰ Ibid., p.10

all other folk were glad to be at home, snug in bed. But then Mr. Sleuth himself admitted that he was a funny sort of gentleman.³¹

(奇妙な考え—奇妙な習慣であるが、ひどく寒い霧の夜、夜半過ぎに彼は散歩するのである。そんな夜には、他の人達なら誰だって家に居て、寝床で暖まつ(原文ママ)ていたがる筈だ。しかし、スルウス自身、自分が、おかしな紳士であることを自認していた。)³²

下宿人スルウス氏は身なりのきちんとした紳士なのだが、霧の夜の外出は彼が連続殺人事件の犯人であることを示唆している。またスルウス氏所有のゴム底の長靴。これら一つ一つが読者にはスルウス氏と事件を結びつける鍵として提示されてゆく。

しかし一方で、スルウス氏が出かける夜にロンドンを覆っていたのはあの黄色い硫黄成分の混じった石炭を燃やして出る煙だったと思われるものの、ローンズはそうした描写は行っていないようだ。霧は霧で、ロンドン名物でもなく、11月のロンドンに当たり前のようにかかる霧。ディケンズの霧のような荒廃のメタファーは見られず、霧は読者の目から犯人を隠す単なる仕掛けとして用いられているだけのように見える。

娘ダイジイが父バンティングに読んで聞かせる新聞の記事、「復習者 一つの理論」は次のように書かれている。

On foggy nights, once the quiet household is plunged in sleep, he creeps out of the house, maybe between one and two o'clock, and swiftly makes his way straight to what has become The Avenger's murder area. Picking out a likely victim, he approaches her with Judas-like gentleness, and having committed his awful crime, goes quietly home again.³³

(霧の夜などには、物静かな、この男は、皆が寝静まった頃の夜中の一時か二時に起きだして真直ぐに復讐者の殺人事件の問題の箇所へやって参ります。そして被害者らしいものを探し出して、ユダのような優しさで、傍へ行き、恐ろしいことを仕出かして家へ又帰つて—原文通り引用—ゆくの。)³⁴

これは一つの理論によって推測された連続殺人事件の犯人像というよりも、むしろ映画の一場面を見ているかのような典型的な犯行現場および犯人像であるかのように思える。『ブルース・パーティントン型設計図』の冒頭でホームズは次のように予見していた；“The thief or the murderer could roam London on such a day” (こんな晩に泥棒や殺人者がロンドンの街をうろつくのだよ)。一方で『下宿人』ではロンドンの冬の光景と殺人事件が常套句になって反復し、さらに犯行の恐怖だけが純化して抽出されている。

この『下宿人』のプロットを特徴づけるのは犯行と霧との結びつきについての具体的描写がほとんどないことだ。バンティング夫婦が抱く疑念、新聞の取り上げる事件記事、証人尋問に立つ証人たちの意見など、ロンドン市民の間で膨らむ犯人像と事件の恐怖性が時間の進行とともに深刻化する。心理的不安の高まりがこの物語を動かしているように見える。事件はすでに起きていて、霧がすでにそこにあって、凶悪犯は市民に紛れて平素の生

³¹ Lowndes, Marie Belloc, *The Lodger*; Kindle, p.33

³² ローンズ, ベロック 『下宿人』、早川書房、1987年、加藤衛訳、pp.54-55

³³ Lowndes, p.58

³⁴ ローンズ, p.98

活を行っており、異常な現象ながらもロンドンに霧も悪もその腹のうちに抱え込んでいる。『下宿人』にはホームズが立ち向かった悪とか、それを解決する正義とかがあるのではなく、また両者の対決といったクライマックスもない。遠方への見通しがきかない霧の中のロンドンで漠然として肥大する恐れがただただ支配的である。

ここで、映画化された『下宿人』について付記しておく。

ローンズの『下宿人』を映画化したのはアルフレッド・ヒッチコック (Alfred Hitchcock) だった。彼が映画『下宿人』を世に表したのは1927年のこと。本作品が彼の3作品目となるが、単独で監督としてのメガホンをとったのはこれが初作品であった。ヒッチコック『下宿人』には、後にスリラー、サスペンスの分野で第一人者となった彼の創意が随所に見られ、1927年の第一作目無声映画とは思えないほどの仕上がりと言える。

ヒッチコックの『下宿人』はローンズをベースにしているものの、下宿人スルウス氏が実は犯人ではなかったという点など、プロットにおいて大きな相違がある。また、霧の取り入れ方に関しても両者ではまったく異なっている。ヒッチコックでは犯行が行われるのは火曜日の晩であるのに対して、ローンズでは霧の晩。スルウス氏の奇妙な行動とそれに疑念を抱くバンティング夫婦、最後には人違い、誤認で追いつめられるスルウス氏というように、ヒッチコックの映画のミステリー的要素は霧を大きく排除した形の心理サスペンスとして深められている。

6 最後の霧—『霧の中の虎』

マージェリー・アリングガムが『霧の中の虎』³⁵を発表したのはまさにロンドンスモッグが発生した1952年のことで、映画版 *Tiger in the Smoke* が制作されたのは4年後の1956年である。霧 (題名にあるのは“smoke”である) はその題名にある通り、アリングガムの作品ではプロットの随所で用いられている。これは“The Murderer in the Fog”³⁶ (霧の中の殺人鬼)³⁷のミステリーだ。映画版では、ロンドンスモッグのわずか4年後のロンドンがロケで映し出され、いまだに煙害が収まらない様子が画面に広がる。こちらは歴史的に見ても貴重な映像であると言えるだろう。アリングガムの冒頭には次のようなロンドンが描かれている。

The fog was like a saffron blanket soaked in ice-water. It had hung over London all day and at last was beginning to descend. The sky was yellow as a duster and the rest was a granular black, overprinted in grey and lightened by occasional silvers of bright fish colour as a policeman turned in his wet cape.³⁸

(霧は氷水に浸したサフラン色の毛布を思わせた。一日じゅうロンドンの上空にあったのが、今ようやく下におりてきたところだった。空だけが集塵機のような黄色で、ほかはざらざらした黒にグレイを刷いた色に沈み、時々、ぬれたケープをはおった警官が向きを変えるたびに細長い明るい鉛色がちらりと光って見えた。) ³⁹

空は氷水に浸したサフラン色、黒にグレイを刷いた色に沈むロンドンの街。今まで見てきたようなロンドンの「霧」をそのままなぞったような描写だ。石炭を燃やして出る煤煙を知らない現代では想像すらもできない黄色。

³⁵ アリングガム, マージェリー 『霧の中の虎』, 早川書房, 2001年, 山本俊子訳。Allingham, Margery, *The Tiger in the Smoke*, 1952, 以下英文の引用はVintage (Penguin Random House UK) 版による。

³⁶ Allingham, p. 205

³⁷ アリングガム, p. 204

³⁸ Allingham, p. 17

³⁹ アリングガム, p. 9

煤が混じり黒く見える街中。『ブルース・パーティントン型設計図』や『下宿人』で描かれた霧に潜む悪という文学的な常套句を知っている者にとっては、この霧はすでに事件の始まりなのである。続く描写はさらにロンドンの霧の特徴を言い当てている。

The fog had crept into the taxi where it crouched panting in a traffic jam. It oozed in ungenially, to smear sooty fingers over the two elegant young people who sat inside.⁴⁰

(タクシーが交通渋滞で止まると、霧は車のなかまでしのびこんできた。寒々とすき間から入ってきて、煤によごれた指で、中に坐っているエレガントな二人の若い男女を撫でまわした。) ⁴¹

現実のロンドンの霧は、霧と煙の混じりあったものだった。映画版『霧の中の虎』でも、もくもくと湧き上がる霧=煙は登場人物たちを包み込んでいる。映像を見た者には紛れもなく煙である。霧ならば、暖められた室内に入りこんだときに潜熱により加熱されて消えて見えなくなるが、石炭を燃やして出た煙は消えない。煙は水とは違う微粒子の集合体だからだ。タクシーの中にまで入り込んでくる煙とは、どれほどロンドンの空気は汚れていたのだろうか。さらにアリンガムの描写を見てみよう。

The overhead lamp shining on the fog made it look as though the scene was taking place under muddy water. Distances were deceptive and colours untrue. ⁴²

日が暮れた夕方から冷え込んでくるロンドンでは、家庭で燃やす石炭の煙が徐々に市街を包み込んでくる。あたかも濁った水の中 (muddy water) にいるかのようにぼんやりと輪郭がなくなり、遠方を見ても距離感というものが人の目を欺くかのよう (deceptive)。実際に 1950 年代の霧に覆われたロンドンを写した写真や、映画『霧の中の虎』の映像は数メートル先も見えないほどだ。この霧に包まれた夜は“thick as canteen coffee”⁴³ (安い食堂のコーヒーみたいにどろりとして)、その中で犯人を捜すのは“looking for a flea in a bust feather bed”⁴⁴ (飛び散らかった羽毛布団の中で蚤を探すようなもの)。アリンガムの『霧の中の虎』では悪党の側は霧の中で人違いをし、追う側は「霧」の中で見失う。ロンドンの霧はミステリーの恰好の舞台に変えられている。

“*Tiger in the Smoke*”の序で Susan Hill はこの霧を次のように述べている。“The fog is sinister and frightening. And anything may happen in it and be concealed, secrets, evil deeds, swift cunning movements. The fog gets into nostrils and lungs and eyes – and in some strange way, into hearts and minds, too. It is more, far more, than merely a tiresome feature of winter weather in the great city.”⁴⁵ 「霧」は悪にとっても正義にとっても何が起こり得るかわからないもの。冬の大都市ロンドンの市民を困らせる天気などと言ったものでは到底なく、外出すらままならない軟禁状態にも見える状態に陥れる恐怖そのものに見える。

アリンガムの『霧の中の虎』が書かれた 1952 年のロンドンはまだ第二次世界大戦の傷跡が大きく残っていた。

⁴⁰ Allingham, p. 17

⁴¹ アリンガム, p. 9

⁴² Allingham, p. 31

⁴³ Ibid., p. 144

⁴⁴ Ibid., p. 145

⁴⁵ Ibid., p. 9, 'Introduction' by Susan Hill.

作品中にもその記憶がくっきりと残っている。たとえばドイツが開発した弾道ミサイルV 2の着弾。

V2's? The whole city waiting. Silent. People on edge. More waiting. Waiting for hours. Nothing. Nothing to show. The strike a light! Suddenly, no warning, no whistle, wallop! End of the ruddy world! Just a damned great hole and afterwards half the street coming down very slowly, ...⁴⁶

(V 2、覚えてますか。町じゅうが待っていた。沈黙。みんなびりびりして待っていた。まだ来ない。そうやって何時間も待つ。来ない。何も見えない。そのうち、いなずまのように、突然、何の前触れもなく、ホイッスルもなく、ドカーン。いまましい世界の終わりだ！でっかい穴があき、そのあと町半分がゆっくりと崩れ落ちてくる。) ⁴⁷

V 2 ミサイルによる空襲の警報、明かりを消して壕に避難し、着弾に備える沈黙の時間。「霧」で包まれた静かな夜の闇と、強盗事件の犯人が酔っ払いを襲撃するために息をひそめて隠れる闇とが、戦時ロンドンの恐怖の時間に重なりあっている。ドイツ軍はヒトラーによる報復命令でV 1型ロケット爆弾とV 2型ロケット弾をロンドンが主な標的となったイギリスをはじめベルギーやフランスに向けて発射した。1944年6月に空爆が始まり、それが終戦まで続く。被害はこの攻撃によってロンドンで9000人以上の死者を出したとされる⁴⁸。どこに投下されるか分からない不安と恐怖に約1年の間ロンドン市民はおびえなければならなかった。『霧の中の虎』は第二次世界大戦の記憶に霧の不安を二重写しにしてロンドンの心的イメージを描き出していると言えるだろう⁴⁹。

7 おわりに

イギリスでは1952年のロンドンスモッグが契機となり「大気清浄法」(Clean Air Act 1956)が1956年に制定された。これによって、ロンドンの中心部などが煤煙規制区域(smoke control areas)に指定され、指定された燃料(authorised fuel⁵⁰)以外の燃料が使用できなくなり、煙を煙突から排出することが厳しく規制された。ロンドンの「霧」はこれに合わせて遠い昔の出来事になった⁵¹。イギリスと言えば産業革命発祥の地で、これは石炭による革命でもあった。石炭利用の拡大と普及はほんのわずか60年ほど前まで続けられてきた。今日のロンドンの空を見て、エンドウ豆スープを想像できるだろうか。ましてや大気汚染によりわずか5日で4000人の死者が出たことなど信じがたい事実であろう。もはや石炭が家庭で利用する燃料ではなくなり、いわゆる「先進国」に住む私たちはその煤煙(smoke)を知らないが、これをただの歴史話や文学の世界だけに留めておいていいはずがない。

ロンドンスモッグの実際とそれに至る歴史についてはさらに稿を改めて論じることにしたい。

⁴⁶ Allingham, p. 50

⁴⁷ アリングム, p. 47

⁴⁸ クラウト, ヒュー, 『ロンドン歴史地図』, 東京書籍, 1997年, p. 118-119 など。

⁴⁹ Allingham, p. 14, 'Introduction' by Susan Hill, "The Second World War is still very close to London and its citizens – the novel was written in the early 1950s – its physical aftermath still visible, its sufferings raw. To the 21st century reader, that is all much farther away."

⁵⁰ Clean Air Act 1956, 11 Smoke control Area (2)及び(4)を参照。

⁵¹ 実際には1957年と1962年にもスモッグが発生し、それぞれで死者を出しており、1968年と1993年に法改正が行われている。

参考文献・参考URL

- 1 Allingham, Margery, *The Tiger in the Smoke*, Vintage, 1952
- 2 Baranauskas, Liam, *The Historically Hazy Story of Donora's Deadly Smog: A 1948 environmental disaster in the Pennsylvania town resulted in half truths, conspiracy theories, and the introduction of clean air laws*, Atlas Obscura, 29 Nov., 2017.
<https://www.atlasobscura.com/articles/donora-smog-1948>, 2019年11月19日最終閲覧
- 3 Bethune, Brian, *A Foggy memory: The fade of fog from our literary imagination*, Nov. 27, 2015,
<https://www.macleans.ca/culture/books/a-foggy-memory-the-fade-of-fog-from-our-literary-imagination/>
2020年1月12日最終閲覧
- 4 Brimblecombe, Peter, *The Big Smoke: A history of air pollution in London since medieval times*, Routledge, 1987
- Corton, Christine L., *Beyond the pall ... how London fog seeped into fiction*, The Guardian, Sat. 31 Oct. 2015
12:30 GMT
- 5 Corton, Christine L., *London Fog: The Biography*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2015
- Dickens, Charles, *Bleak House*, 1853
- 6 Dronsfield, Alan, *Percivall Pott, chimney sweepers and cancer*, Royal Society of Chemistry, 1 March, 2006.
<https://edu.rsc.org/feature/percivall-pott-chimney-sweeps-and-cancer/2020205.article>
2019年10月8日最終閲覧
- 7 Freese, Barbara, *Coal: A Human History*, Arrow Books, 2003
- Heggie, Vanessa, Over 200 years of deadly London air: smogs, fogs and pea soupers, The Guardian, 9 Dec. 2016.
- 8 Ivel, J., *Donora, Pennsylvania Smog Event of 1948*, Perspectives on Air Pollution and Engineering, Guelph Engineering Journal, Issue 6. May, 2017.
- 9 Hill, Susan, 'Introduction', included in *The Tiger in the Smoke*, Vintage, 2015
- 10 Jacobson, Mark Z., *Atmospheric Pollution: History, Science, and Regulation*, Cambridge University Press, 2002
- 11 Jacobs, M. B., *Air Pollution and Its Relation to Pulmonary disease*, Arhiv za higijenu rada i toksikologiju, Vol. 16 No. 3, 1965.
- 12 Jun Zhang, Yao Lir, Liang-liang Cui, Shou-qin Liu, Xi-xiang Yin and Huai-chen Li, *Ambient air pollution, smog episodes and mortality in Jinan, China*, Scientific Reports 7, 11209, 2017.
- 13 Liam Baranauskas, *The Historically Hazy Story of Dnora's Deadly Smog – A 1948 environmental disaster in the Pennsylvania town resulted in half truths, conspiracy theories and the introduction of clean air laws*, Atlas Obscura, November 29, 2017.
- 14 Lowndes, Marie Belloc, *The Lodger*, 1908
- 15 Markovics, Joyce, *Killer Smog*, Bearport publishing, 2018
- 16 Marrs, Timothy C. and Maynard, Robert, *Introduction and General Aspects of Risk Assessment*, Issues in Toxicology No.36, 2018.
- 17 Mirka Fugas F Valic, *Indoor and outdoor air pollution*, Archives of Industrial Hygiene and

Toxicology 19:Suppl 1:49-60 · February 1968

18 Peps Company, *The peril in the air*, 1913.

19 Potenza, Alessandra, *In 1952 London, 12,000 people died from smog – here's why that matters now*, The Verge, Dec. 16, 2017.

20 Quante, Markus, Ralf Ebinghaus, Götz Flöser, *Persistent Pollution – Past, Present and Future*, Springer, 2011

21 Quinault, Roland, *Britain in 1950*, History Today, Volume 51, Issue 4 April 2001.

22 Synder, L. P., *The Death-Dealing Smog over Donora Pennsylvania: Industrial Air Pollution, Public Health Policy, and the Politics of Expertise, 1948-1949*, Environmental History Review, 18(1), 117-139, 1994.

23 Travers, P. L., *Mary Poppins*, Harcourt, INC, 1934

24 Thorpe, PROF., *Coal: Its History and Uses*, Macmillan and co., 1878

25 Vaughan, Adam, *Your memories of the 1952 great smog*, The Guardian, 6 Dec. 2012.

26 Wise, William, *Killer Smog*, An Authors Guild Backinprint.Com Edition, 1968

1 アリンガム, マージェリー『霧の中の虎』、早川書房、2001年

2 太田幸雄「大気汚染と酸性雨」、平成20年度北海道大学公開講座持続可能な社会と北海道発見：地球環境と私たちの暮らし、19-23、2008年

3 嘉陽英朗「ジョン・イーブリンと『フミフギウム』—17世紀ロンドンの大気汚染」、イギリス哲学研究第24号、2001年

4 ディケンズ, チャールズ『荒涼館』、筑摩書房、1989年、青木雄造・小池滋訳

5 トラヴァース, P.L.『風にのってきたメアリー・ポピンズ』、林容吉訳、岩波書店、1954年

6 ドイル, コナン『シャーロック・ホームズ全集』8、小池滋監訳、筑摩書房、1997年

7 蛭川久康、井上宗和『テムズの流れに沿って』、大修館、1979年

8 見市雅俊「都市計画、石炭煙害、森林保護—ジョン・イーヴリンの世界」、中央大学文学部紀要172、187-252、1998年

9 ローズ, リチャード『エネルギー400年史』、秋山勝訳、草思社、2019年

10 ローンズ, ベロック『下宿人』、早川書房、1987年